わが街わが故郷

旭精工株式会社とその周辺

（会社の紹介）

旭精工株式会社（商標：ASAHI）

〈本社及び工場〉

（所在地）〒593－8324

大阪府堺市鳳東町６丁570－1

（業種）軸受ユニット及び機械部品等の製造販売

当社は1928年（昭和３年）、創業者柴田貞吉とその協力者菊川健一郎、石崎源吉によって、当時欧米に比し著しく遅れていたわが国の機械工業のレベルアップに重要な要素であるベアリングに着目し、堺市一条通りに合名会社SKIボールベアリング製作所として発足したのが始まりであります。

商標、社名は上記３名のイニシアルをとったものですが、商品が世界に拡がるにつれSKFと混同されやすいところからSKI－ASAHIを経て現行のASAHIになりました。

1938年（昭和13年）11月に前事業を継承し、旭精工株式会社を設立、事業拡大に伴い、翌年、本社及び工場を現在地の堺市鳳地区に移転し今日に至っております。

1945年（昭和20年）７月の米軍機による大空襲では、壊滅的打撃を受け、同年８月15日に終戦となりましたが、復興再建には大変な苦労が伴いました。

1951年（昭和26年）に日本で最初に軸受ユニット（ピローブロック）の製造販売を開始し、当時としては画期的な新商品で、ユーザーからも好評で、現在の当社の方向を決定づけたものでした。

本社・工場の全景

1966年（昭和41年）からは一般の軸受の生産を止め、軸受ユニットの専業体制となり、1979年（昭和54年）には、小形サイズのユニット、シルバーシリーズを商品化、最近では時代のニーズに合わせステンレスシリーズ等を商品化し、市場からは高く評価されています。

現在は軸受ユニット以外に、エアークラッチ、ブレーキ、直線運動機器等にも注力し、販売の比率は、軸受ユニット約75％、ユニット以外商品約25％となっています。

創業以来、技術重視を基本に新しい商品づくりに取り組んでいます。

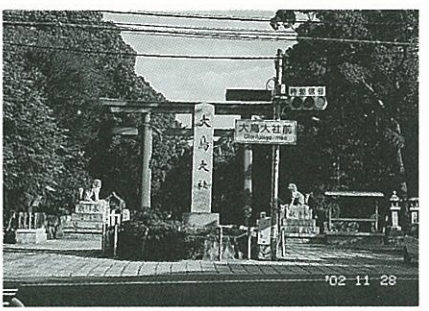
（近郊の紹介）

堺市は古代の仁徳天皇陵古墳や、中世の自治都市の名でよく知られていますが、ここでは当社の本社及び工場のある鳳（おおとり）地区の近郊について、ご紹介することとします。

鳳と大鳥大社

「おおとり」の地名は大鳥大社から連想されますが、大鳥とは書かず「鳳」の字が使われているのは、家原寺で誕生した奈良時代の名僧行基が、ここに神鳳寺（しんほうじ）という寺を建てたので、その中の鳳の文字を使うようになったようです。

さて当社から西へ約300ｍほどのところに大鳥大社があり、その御祭神は、日本武尊（やまとたけるのみこと）と昔この地方に住んでいた大鳥連（おおとりのむらじ）という豪族の祖先であると考えられる天児屋根命（あまのこやねのみこと）の二柱の神様をお祀りしており、和泉国の一の宮で知られ、創建は天武天皇（673年～685年）の時代と伝えられています。



大鳥大社 正面入口

景行天皇の皇子日本武尊は、天皇の命で九州ならびに東国を平定しますが、その帰路で病気のため伊勢の能褒野（のぼの）というところで亡くなりました。その地で葬られますが、尊の屍は白鳥となって大和の方へとびたち、今の奈良県御所市にとどまり、再びとんで河内の古市（今の羽曳野市：白鳥が羽（はね）を曳（ひ）いてとんだので羽曳野の地名がついたという）にとまり、最後に舞い降りたところが大鳥の地だといわれています。里人が白鳥のために社を建ててお祀りしたのが大鳥大社の起源と伝えられています。（白鳥伝説）

本殿は、神社建築史上「大鳥造」といわれる様式を保っており、その構造は出雲大社の「大社造」に似ており、切妻造、妻入社殿で出雲大社に次ぐ古い形式を今日に伝え、神社建築史上重要視されています。

大鳥大社 拝殿

大鳥大社の今一つの特徴は、激しい時代の変遷にもかかわらず、境内が昔のまま残され、いわゆる「鎮守の森」の名にふさわしい、５万平方メートルにおよぶ神域は、多種類の樹木が繁茂し、古くから「千種の森」として親しまれています。

行基と家原寺

当社の東へ約500ｍのところに家原寺（えばらじ）があります。

家原寺の元は行基の母（蜂田古爾比売（はちたこにひめ））の家で、行基は大化の改新の20年後の668年（天智７年）にここで生まれました。

行基は15歳のときに、大和の飛鳥寺で道昭を師として出家得度し、道昭は仏法を説くと同時に、民間布教や社会事業に活躍しましたが、行基はその感化を受けて、道昭の死後、その遺業を継ぎ、民衆救済のため寺を建てたり灌漑用の池や道をつくるなど精力的に社会事業活動を展開しました。

行基は各地を行脚して生涯49の寺院を建てま

したが、その一番最初に母の家を改造して建てたのが家原寺であります。

家原寺 本堂

行基は東大寺の大仏建立事業にも加わり、当時の聖武天皇の信任を得て、家原寺も730年（天平２年）には東大寺式伽藍の堂塔が整備され32の支坊をもつ立派な寺院となりました。また行基は745年（天平15年）業績を認められ聖武天皇から、大僧正の位に任ぜられました。

家原寺の本尊は行基の自作と伝えられる文珠菩薩で、文珠院ともいわれ「知恵の文珠さん」として有名で受験シーズンには合格祈願の受験生とその家族の参拝で賑わいます。

奈良の阿倍の文珠、天の橋立の切戸文珠とともに日本三体文珠の一つといわれています。

浜寺公園と浜寺公園駅

当社から西へ約２㎞の海岸線に沿って浜寺公園が広がっています。

浜寺は高師の浜といわれた昔から「白砂青松（はくしゃせいしょう）」の景勝地として万葉集の歌にもよまれた松林と白い砂浜の美しい海岸でした。

ところが、この松は時代の変遷のなかで幾度も災難にあってきました。

江戸時代には田安藩がこの地を治めていましたが、藩の財政が困窮し、防風護田や漁業にも役立っていた松を数千本伐採したとか、さらに1872年（明治５年）には生活に困った武士を助けるため1800本あった松が848本まで切り倒されました。たまたま翌明治６年に浜寺を訪れた内務卿、大久保利通がこれを見て驚き、次のような歌をよんで天恵の貴重な財産を切ることの非を諭しました。

おとにきく高師の浜のはま松も
世のあだ波はのがれざりけり

忠告を受けたときの堺県令（今の県知事で当時堺市周辺と奈良県は堺県となっていた）税所（ぜいしょう）篤（あつし）は赤面して、次の返歌をよんで早速伐採を中止しました。

いかにせん高嶺おろしの烈しさに
涙ふるいし斧の柄ぞこそ

このことがあって明治６年12月に太政官布告によって、わが国で最初の公園となり、浜寺公園と名づけられ、松の若木をたくさん植えられました。その後、明治30年に大久保利通の考えを後世に伝えるため歌をきざんだ「惜松碑（せきしょうひ）」が建てられ今も公園入口の北側にあります。

浜寺公園内の大久保利通の歌碑「惜松碑」

また第二次大戦後、この公園に米軍宿舎が建設された折にも1700本あまり切り倒されましたが、返還後若松の育成が計られ現在は5000本まで増えています。

ここの松林は人間の手で何回も破壊と再生を繰り返したことになります。

残念なことに1964年（昭和39年）臨海工業地を造成するため、白砂の海岸は埋め立てられ美しい海水浴場もなくなり、時代の流れとはいう

ものの、今となっては惜しまれてなりません。

幾度も災難にあった浜寺公園の松

浜寺公園の入口近くに南海本線浜寺公園駅があります。この駅舎は貴重な明治時代の建造物で、幾何学模様の外観、玄関ポーチのトックリ状の柱など、鹿鳴館を偲ばせる本格洋風デザインです。

明治時代の建築様式の浜寺公園駅舎

1908年（明治41年）に南海本線の難波－浜寺間が複線、電化されますが、それを期に東京駅の設計者でもある辰野金吾氏の設計により1907年（明治40年）に完成したものです。

1998年（平成10年）には登録文化財に指定されました。

当時としては、さぞかしハイカラな駅舎であったことでしょう。

（旭精工株式会社　辰巳　豊）